比翼（ひよく）の束（たばね）　第六十五回

学校は楽しいところであって欲しい

だいぶ前のことになるが、ＮＨＫの朝のテレビドラマ「おしん」が大変な人気を博したことがあった。

子守奉公に出されたおしんが、こどもを背負って小学校の校庭から教室の授業をのぞいている。その時先生が、「そんなに勉強したいなら、子どもが静かな時は教室で授業を聞いてもいいよ」というと、おしんが大喜びする場面があった。

あれは、明治末か大正初めの頃のことだと思うが、昭和になってもまだ学校に行けない子どもがたくさんいた。

今日では、日本ほど学校教育の普及率が高い国はない。それほどわが国の教育制度は進歩発展を遂げてきた。

しかし、その一方でさまざまな教育問題が生じていることも事実である。

7月9日、文部科学省白書が公表され、教育再生に向けた緊急課題として「いじめ」を大きく取り上げている。

おしんと今の子どもを比べてみると、今の子どもたちにとって学校は、行かせてもらえるところから、行かなければならないところと変わってきた。

学校に行けるというのは特権だったのが、権利になり、義務に変わって、否応でもいかなければならないところに変わってきたのである。

しかも子どもにとって学校は、必ずしも行くのが楽しいところではなくなって、また、自分がなぜ勉強しなければならないのかが見えにくくなってしまっている。最近までは、高い教育を受ける人はそれほど多くはなく、高学歴を手にすればよい職業につける。高い地位が得られ収入も多くなる。立身出世ができるということが良くわかっていた。

ところが今の子どもたちにとっては、なぜ大学へきたのかもはっきりしない。そしてこの先どんな眺望が開けているのかわからない、大きな先の目標が見えなくなってしまっている。

そのうえ、学校で教える知識は、基本的には生きた動いている知識ではない。

戦前期の子どもたちにとって、学校は重要な知識や情報の源であったが、今生きて動いている知識や情報は学校外でテレビや雑誌、インターネットなどを通じて新鮮で、カラフルで理解しやすいものが提供され、情報化が進めば進むほど学校に求められるものは何なのか、問われてくることになる。

しかし、よく考えてみると、社会がどのように変化しようとも、学校は子どもたちに組織的計画的な教育を行うという基本的構造は変わることはない。

しかも同じ年齢の子どもたちに、集団的な指導を行う場であることも変わらない。

したがって学校は、一人ひとりの子どもが真善美という人類普遍の理想に一歩でも近づこうと努力していく場であり、それを援助し励まし、子ども同士、子どもと教師が魂の触れ合いを通して家庭とは違った場で人間としてのあり方を学んでいくところであろう。

こども一人ひとりは、人格をもった尊い存在である。一人ひとりが大切に扱われていると感じ、それぞれが自分の立場や役割を感じ自分の存在が自覚できるような学校であれば、子どもたちは、仲間や先生との触れ合いの中で、自分の良さを見い出し、存在感や自己実現の喜びが感じられ、学校へ行くことが楽しくなるのであろう。

矢板市の子どもたちそれぞれに、しっかりとした基礎学力を身につけて欲しいし、また美しいものを見て美しいと感じ、人の悲しみを自分のこととして受け止められる心豊かで力強い子どもに育って欲しいと願っている。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。